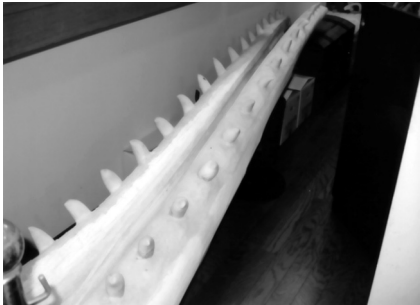


スクリムショー（鯨歯、鯨骨、鯨鬚細工）は 果たしてアメリカ独自の文化か？

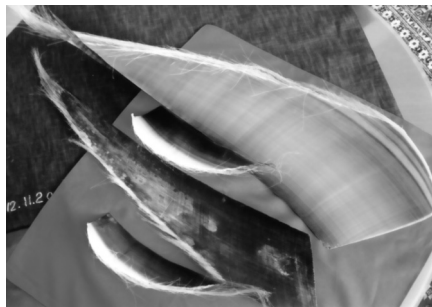
池 田 智



▲ マッコウクジラの顎骨と歯



▲ マッコウクジラの歯



▲ ナガスクジラなどの鬚



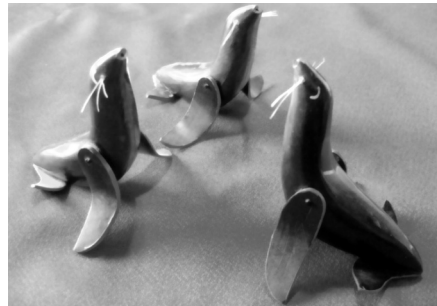
▲ ケネディ蒐集のレプリカ



図1 アメリカの典型的な捕鯨風景



▲ マッコウクジラの歯から
つくったペンギン



▲ 鬚からつくったオットセイ

はじめに

2001年に創刊されたポップカルチャー学会の会誌 APOCS に、「試論—スクリムショー (scrimshaw) について」を寄稿した。

スクリムショーとは、端的に言えば、歯鯨を代表するマッコウクジラの歯や顎の骨、あるいは鬚鯨のなかでも、もっとも長い鬚をそなえるセミクジラの鬚を材料に作り出されたさまざまな装飾品や日常生活用品のことである。なかでもマッコウクジラの歯を磨いてエッチングに見られるような繊細な線で帆船や鯨取りの風景、あるいは女性など、さまざまな模様を施したものが現在スクリ

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

ムショーとして最も知られるものである。このスクリムショーが脚光を浴びることになるのは、アメリカ合衆国第35代大統領ケネディ (John Fitzgerald Kennedy, 1917-63) の執務室の机にそれが見られるようになってからのことである。それまでは捕鯨博物館に19世紀の遺産として陳列されているか、捕鯨関係のアンティークを蒐集する人たちやマサチューセッツ州南東部の沖合に位置するナンタケット島の「ライトシップバスケット」(lightship basket) と呼ばれる手編みの籠に関心のある人たちの間に知られている程度であった。現在でも scrimshaw とか、これを作る人を表す単語 scrimshander に馴染みのない英語を母語とする人たちもいる。scrimshaw という語自体の語源にもさまざまな説があって、特定されていない。スペリングも今では scrimshaw, scrimshander で固定化されたが、固定化されるまでにはさまざまに綴られていた。

ナンタケット島の歴史協会博物館に、捕鯨船ポカホントス号に乗っていたウォルター (William H. Walter, ?-?) の日誌の1836年の一部が展示されている。そこには「みんながスクリムシャンディング (scrimshanding) をしていた。先住民のことで骨を加工して小さな装飾品などをこしらえることだ」と scrimshand (ing) という語が見られ、しかもその語源まで記されている。ウォルターの日誌以前の1821年3月14日の日付で、マサチューセッツ州ロチェスターの捕鯨船オライオンの船長ルース (Obed Luce, ?-?) の航海日誌には、scrimshont という語が見られることを、スクリムショー研究家のマリー (Richard C. Malley, 1952-) がその著書に引いている (p. 16)。また、出版されたのは1874年だが、著者デイヴィス (William M. Davis, 1815-91) がガラパゴス諸島を訪れた航海が1842年だったときの日誌『海の狩人，アメリカの鯨取り』(Nimrod of the Sea, or the American Whaleman, 1874) では、scrimshone (p. 264) が用いられている。メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) は『モビーディック—鯨』(Moby-Dick, or, the Whale, 1851) で skrimshander と、現在では固定化された綴りに最も近い綴りを用いている。このほかにもさまざまな綴りが用いられたことは、既に発表した拙論で紹介してあるので本稿ではこれ以上紹介することは控えたい。

スクリムショーについて、捕鯨博物館の館長やスクリムショー研究家のなかに永年アメリカ独自の文化だと主張してきた人たちがいるが、彼らはその根拠を機械によってではなく、アメリカの捕鯨船内で手作りされたスクリムショーの多様性と数に置いている。

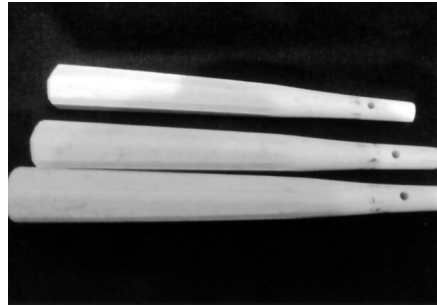
多様性とは、マッコウクジラの歯や panbone と呼ばれる顎骨、あるいは

baleen とか whalebone と呼ばれる鯨鬚を素材にした装飾品から日常生活品にいたるまで、その種類が多岐にわたっていることである。数とはどんなに少なく見積もっても 140 万個、多く見積もって 300 万個に及んだことが次に引くところから推定できるだろう。『ニューイングランドの鯨取り』(*The Yankee Whaler*, 1926)の著者アシュリー (Clifford W. Ashley, 1881-1947) は、「ニューイングランドの水夫が外国人水夫に仕事をゆずるまでのわずか 70 年かそれ以上の年月の間の余暇に、2 万人の鯨取りの大部分の人たちがいつもいつも余暇の大半をマッコウクジラの歯や骨から美しい物を熱心に作り出すのに費やしていた」(pp. 111-2) と語っている。これを前提に、仮に一人の鯨取りが 1 年に 1 個作ったとして、140 万個のスクリムショーが作り出されたはずである。1 年に 1 個というわけではないだろうから、現実には更に多くのスクリムショーが作り出されたはずである。『ジョン・F・ケネディ—スクリムショー蒐集家』(*John F. Kennedy: Scrimshaw Collector*, 1964)の著者バーンズ (Clare Barnes, Jr., 1907-92) は「多くの水夫がスクリムショーをたくさん作りだした。捕鯨中のスクリムショーの総数を 300 万個近いと見積もっても差し支えないだろう」(pp. 14-5) と述べている。また、『スクリムショー—鯨取りの民藝』(*Scrimshaw: Folk Art of the Whalers*, 1957)の著者アール (Walter K. Earle, ?-?) によれば「推測だが、40 年以上の間に 15 万人から 20 万人の男たちが捕鯨の合間にスクリムショーを拵えた」(p. 21) と、具体的な数は上げていないもののスクリムショーに関わった人数を提示している。こうしたスクリムショーの数やそれに関わった人の数だけに注意を向けるなら、スクリムショーをアメリカ独自の文化と主張する人たちがいることは不思議なことではない。だが、scrimshaw という用語にこだわることなく、筆者が蒐集してきたものを見るだけでも、ニュージーランドのマオリ族、シベリア北東部のチュクチ族、あるいはアラスカのエスキモーの間でも同じようなものが民族的文化物として作り出されているし、日本でも「鯨歯細工」あるいは「鯨鬚甲（鯨髯）細工」と呼んで、早くは江戸時代から簪などの装飾品や組み立て式枕などの日常生活用品が作り出されている。これらも英語で紹介するとなると scrimshaw を使わざるを得ない。

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？



▲ 南蛮船（鬚）



▲ 三味線の糸巻き（鯨顎骨）



▲ 皿と楊子（鬚）



▲ お守りヘイマタウ（歯・マオリ族）

スクリムショー研究では現在最も定評のあるフランク (Stuart M. Frank, 1948-) がその著書『スクリムショー・アーティスト事典』(*Dictionary of Scrimshaw Artists*, 1991) にまとめている内容が，筆者にもうなづけるのでここに引いておきたい。

スクリムショーは鯨取りの本来の職業上の手工芸品で，独創的でしばしば工夫に富んだ芸術形式である。素材は捕鯨の副産物であり，その目的は船上で仕事のない時間をつぶしたり航海と航海との間の陸上での時間を過ごすためであった。スクリムショーは19世紀—モビーディックとエイハブ船長の時代の一—ヤンキーの鯨取りともっともよく結びつけられるが，スクリムシャンダーの芸術は伝統的な手仕事の捕鯨の時代，英国，オーストラリア，ポルトガルの船乗りによって広範囲に，また熱心に行われていた。20世紀の捕鯨船や陸上の機械化された捕鯨産業会社で働く事実上全ての国の男たちによって行われていたし，また時には海軍の兵隊，英国や米国の海軍将校，遠洋商業船の乗組員，それから帆船時代に捕鯨船の船長について行った妻や子どものなかにさえスクリムショーを作った人たちがい

た。(p. xix)

長い間捕鯨に携わる男たちだけが行うと考えられていたスクリムショーに、女性や子どもまでが関わったことをフランクは触れているが、バーンズはスクリムショーに携わった女性の氏名を具体的にあげている。

仮にスクリムショーが非常に男性的な芸術であるとしてもルールには例外があります。捕鯨船の船長である夫について長い航海に出る妻のなかには、数名であってもスクリムショーを女性として嗜むひとがいました。1878年、遙か離れたインド洋のデソレイション島で捕鯨船キャタファ号の船長の妻イスラエル・モーリー夫人が鯨の鬚の糸巻き入れを故郷ナンタケット島にいる別の船長の奥さんへの贈り物として作りました。1875年、パーク型帆船オハイオ号で夫とともに航海に出たサリー・スミス夫人が、夫が鯨の鬚で箱をつくるのを手伝った、と日記につけています。(p. 14)

また『ミスティック港のスクリムショー』(*Scrimshaw at Mystic Seaport*, 1958)の著者スタックポウル (Edouard A. Stackpole, 1903-93) は、「パーク型帆船ベンジャミン・カミングズ号の航海日誌にも『ジェンキンス船長と奥さんと乗組員全員がスクリムショーをしている』という記録がある」(p. 31) と記している。児童向けの捕鯨史では定評のある『ニューイングランド人の捕鯨物語』(*The Story of Yankee Whaling*, 1959) は、1868年にマサチューセッツ州ニューベドフォードを出港した捕鯨船ローマン号に船長ジャーネガン (Jared Jernegan, 1825-99) が、妻ヘレン・クラーク (Helen Clark Jernegan, 1839-1934)、6歳の娘ローラ (Laura, 1862-?), 4歳の息子プレスコット (Prescott, 1866-1942) を連れていたことを、ローラが8歳のときに祖母宛に書いた手紙を添えて紹介している (pp. 100-101)。後述するが、男女間においても平等主義を守ったクウェイカー教徒(フレンド派信徒)が捕鯨産業で重要な役割を果たしたことを考慮すれば、ありえたことであった。

こうして見ると、筆者が既に発表した拙論で、スクリムショーはもっぱらアメリカの捕鯨船員が海上にいる間にこしらえたものだけとしたことは一つの見方であって、その見方だけに拘ることはないと感じてきている。

1. 日本人にとっての鯨の大切さを感じる地方食文化

北アメリカにおける捕鯨が早くは17世紀初頭に英国の探検家ウェイマス (George Waymouth, ?-?) によって目撃されたことは、その記録にある (Shapiro: 10)。現在のメイン州の沖合で、先住民がおびただしい数の小舟で鯨を取り囲み、棍棒や弓矢で鯨取りをしていたという。ヨーロッパからの移民は積極的に沖合へ出ることはなく、入江に迷い込んだ鯨を捕獲していた。江戸時代から明治時代の日本のそれに近い。19世紀に入ると、もっぱら鯨油，鯨蠟，鯨鬚を求める捕鯨が始まり「鯨の構成要素の一部（頭部，脂肪層，竜涎香など）だけが価値あるものと見なされ，残り一何トンもの肉，骨，内臓—は捨てられた」 (Philbrick: 65) のである。ここにアメリカの捕鯨と日本の捕鯨との違いが生まれた。

日本では鯨肉を保存食として加工し，海から遠く離れた場所でも栄養源として珍重された。この夏経験したことの一端を紹介し，日本人にとって「鯨は(福の神の一つ) 恵比寿」で鯨を食料としてだけでなく，その全てを利用する文化を生み出したことをまず述べておきたい。

毎年6月の中旬から下旬にかけて，山菜の「みず」を青森県中里に親戚もつ友人が送ってくれる。イラクサ科の多年草で「鱗^{うわぼみそう}草」とも「みずな」とも呼ばれている。青森県や秋田県あるいはまた山形県では夏の山菜として食卓にのる。食べ方はさまざまあるが，筆者がこの夏初めて知ったのが「もぎりみず汁」である。この料理を知ったのは，山形県新庄市出身で，現在秋田県湯沢市在住の友人とのメールのやりとりがきっかけであった。

「もぎりみず汁」は，数本ずつもぎっては皮を引いたみずにニンジンやゴボウ，こんにゃくなどを入れた上に「塩鯨」を加えて味噌仕立てにした料理で，山形県新庄市や最上郡鮭川村に伝わる「伝えたい，残したいふるさとの味」となっている。欠かせない食材が鯨の本皮と呼ばれる脂身を塩漬けにした「塩鯨」である。秋田県湯沢という海から離れた山間部の料理に，たとえ塩漬けだとしても，なぜ鯨なのか，不思議なものを感じる。数年前にこの友人宅を訪れたとき，塩鯨が入った味噌汁をいただいた。湯沢辺りでは塩鯨を使うのは普通だという。現在でも日常的に販売されているそうである。山間部で，しかもマタギの文化を抱える地方にもかかわらず，なぜ塩鯨なのだろうか。

日本で動物の肉を食料にすることを避け始めたのは、仏教文化の影響という説がある。鯨がその影響から免れられたのは、海に棲息する巨大な魚と捉えられていたためだろう。また「塩鯨」は禁漁となった現在とはもかく、安価な保存食のため、山間部では動物性タンパク質や脂肪を摂る上で重要な食材となっていたことは想像に難くない。したがって捕鯨文化が栄えた宮城県や岩手県から山越えて、鯨やイルカの肉が持ち込まれたと仮定することは可能だ。

一頭の鯨で七浦が潤うと言われたほど「鯨魚捕り」すなわち捕鯨は重要な文化で、捕獲した鯨の肉や内臓、皮、その他の部分をことごとく利用した。特に尾羽や畝皮の部分の塩蔵は消費期限が延ばせ、また出汁としての利用価値があるため比較的早くから行われ（前田・寺岡：172）、また広範囲に流布しやすかったようだ。前田・寺岡によれば、東北地方では「脂皮をダシに使用し、それを幾回も使って、遂に煎皮になるまで使用する等の風習もある」（p. 175）そうだ。秋田県湯沢市や山形県最上郡鮭川村などへ塩鯨がいつ頃から入ったのかは分からないが、三陸地域における「網取り式捕鯨」が江戸時代には行われている（小松 b: 137）から、三陸から山越えて塩漬けにした畝皮などが運び込まれたと考えられる。

もぎりみず汁の他に塩鯨を使った汁物でよく知られているのは、函館を中心とする道南地方の正月料理「鯨汁」と新潟県や福島県会津地方で食べられている「鯨汁」である。新潟県や会津地方では、秋田、山形と同じように夏の暑い時期に体力回復を目的として塩鯨を食べるといふ。違いがあるとすれば一緒に炊く野菜が新潟ではナスが期待され、会津ではジャガイモだそう。秋田県湯沢市の友人のレシピでは、ナスもジャガイモも両方とも入れることになっている。いずれにしても、ナスもジャガイモもミズもすべて夏の時期のもので、塩鯨は基本的に脂身の部分だからこってりとして栄養豊富の印象があり、夏の暑さに勝つための料理として定着したのだろう。また鯨は海の彼方から「福」を運んでくれる「恵比寿」を信仰することと結びついていたため、函館や道南地方のように正月料理となったと考えられる。

恵比寿信仰と結びつくのは、特に沿岸漁業者や鯨取りにとって、それぞれ「鯨は、沖からサカナの群れを岸に追い込んで漁業を助けてくれる有り難い存在」（大隅：76）であり、捕鯨がまだ入江に迷い込んだ鯨を捕獲する時代にあっては、「(鯨が) 自らを犠牲にして捕獲されることにより、人に多くの富をもたらしてくれる有り難い存在」（大隅：77）として「鯨は恵比寿である」と信

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

じたのである。こうした考え方が塩蔵された鯨肉とともに海から離れた地域に伝えられたと解釈することは可能である。

この「鯨は恵比寿」という考え方はその後の日本の捕鯨に深く結びついている。前田・寺岡が詳細に図解 (pp. 226-7) しているように、鯨をまるごと、それこそ皮から骨，内臓にいたるまですべてをあますところなく利用していることに結びつく。この姿勢は日本が天然資源に乏しいこともあるだろうが、それ以前に大隅が指摘するように「日本の捕鯨の特徴は，捕鯨が根源的に恵比寿信仰に深く結びついていることである。鯨は神であり，その有り難い神を感謝して利用させていただくからには，鯨を粗末に扱ってはならない」(p. 77) のである。なお日本における鯨（ヒゲクジラ，マッコウクジラ）の利用図については「わかりやすい鯨の利用イラスト図」(http://keizine.net/2009/01/27_00553.php) を参照いただきたい。

2. 恵比寿信仰に基づく鯨の利用



▲ 鯨塚 東京東品川利田神社



▲ 鯨供養塔 長崎県上五島有川



▲ 鳥居（鯨顎骨製）長崎県有川海童神社

恵比寿信仰と結びついた捕鯨によって、捕獲した鯨の体全体を余すところなく利用する、いや利用しなければならないという考え方を捕鯨に携わる者が軽視したり無視したりすることはできない。近代以前においては、「祟り」が想起されるからである。

日本人と鯨との関係で興味深いのは、祭りや神事、あるいは鯨塚の存在だ。日本全国の鯨にまつわる祭りや神事は、『クジラと日本人』(pp. 88-9)にその内容を含めて紹介されているのでここではその一つひとつには触れない。祭りや神事があるのは、日本の捕鯨が遠洋での捕鯨が始まるまでは入江に迷い込んできた鯨を村全体で、あるいは「鯨一頭で七浦が潤う」ということばが遺されているように、いくつかの村が協力して行うのが普通であった。そのためには団結心が不可欠である。団結心を高める上で重要な役割を果たしたのが祭りであった。

また巨大な鯨を仕留めるために、どれだけの数の人や舟が海に呑みこまれるかは想像に難くない。したがって、海はもとより鯨を鎮めるために神事を疎かにするわけにはいかなかった。また神事は、過去に捕獲した鯨の霊を慰めるためにも、今後の豊漁を祈るためにも欠かせなかった。鯨は親子でいることが多い。捕鯨に携わる者はそれを知っていて、親鯨を捕獲する。捕獲した鯨の胎内に仔鯨が入っていることもある。自分たちが手をかけて殺害してしまった妊娠中の母鯨はもとより仔鯨の祟りを怖れてその霊を慰め、弔うために墓や供養塔を建てる風習が生まれた。福本によれば「鯨の捕らえられて、将に息絶えんとするや、身を伸ばし、大息をついて、一声なき、船につながれながら、二、三遍廻り、のどをゴロゴロと鳴らして絶息する。このとき漁夫は同音に、南無阿弥陀仏を三唱し、三国一や大背美捕りすまいたと謡うのが昔からならわしであったという」(p. 126)。また、鯨の胎内から仔鯨が出てきたときには、「九州では刃刺(止めを刺す役割を担った鯨取り)の羽織に包んで、土佐では襦袢でくるんで、厚く埋葬するのが例であった。なお土佐では、洗米と清酒を供えて祭り、埋葬して七日間は番人をつけて、発掘されるのを防止したと言われる」(()内筆者) そうである。

そこまで鯨を尊重したわけだから、鯨の体全てを余すところなく利用したことは納得できる。また恵比寿である鯨によって得られた収入全てを個々人のものとせず、いくばくかを共同体のために使った例が明治時代に見られた。秋田県男鹿市の現船川第一小学校、新潟県上越市の市立上下浜小学校、福岡県福岡

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

市の市立和白小学校，現在では所在地に石碑しか遺されていない熊本県水俣市丸島町に設けられた学校建設などは，その例である。

3. アメリカにおける鯨の利用

アメリカの捕鯨は，先住民のそれを除けば17世紀ニューイングランドに始まった。捕鯨と言ってよいかどうかは別にして，浜や岩場に座礁した鯨を捕らえたり，入り江に迷い込んだ鯨を捕らえたりする点は日本の捕鯨の始まりの形態に近いものだったが，その目的はもっぱら鯨油，鯨蠟や現在のプラスチックに代わるヒゲクジラの鬚を取ることであった。いわゆる沖合から遠洋における捕鯨が始まるのは，18世紀に入ってからのことである。『アメリカ農夫の手紙』(*Letters from an American Farmer*, 1782) を著したクレヴクール (J. Hector St. John de Crèvecoeur, 1735-1813) は，その「手紙四」で鯨油の臭いに驚いたことを次のように記している。クレヴクールがこの著書を出版したのは1782年だが，執筆には10年を要し，またアメリカ定住を決めたのが1765年のことだから「手紙四」の背景はそのあたりの年代だと判断してよいだろう。アメリカの捕鯨が最盛期を迎える1840年代に至る80年も前のことである。

最初にこの島に上陸したとき，町のあちこちで嫌な臭いがしたのでびっくりしました。これは鯨油が原因でどうしようもないのです…… 埠頭の近くにはじつにたくさんの倉庫があって，主要な日用品のほか大勢の捕鯨船員たちの用具や装備に必要な道具がたくさん入れてあります。(p. 71)

「手紙六」では，アメリカの捕鯨がもっぱら鯨油を目的としていたことがわかるように，「1769年には，彼らは125名の捕鯨船員を調達していました。帰ってきた最初の50名は11,000樽の鯨油を持ち帰りました」(p. 95) と記している。この時代のアメリカはまだ英国の植民地だから，1バレルが36ガロンで換算してよいだろう。1英国ガロンは約4.5リットルだから，11,000樽は49,500リットルの鯨油を持ち帰ったことになる。クレヴクールによれば「マッコウクジラは世界中至る所で見られ，大きさもさまざまである。最大級のもものは60フィート。およそ100樽の鯨油がとれる」(p. 95) そうだから，最大級のマッコウクジラに換算して110頭を仕留めたことになる。この時代の捕鯨は

図1に見られるように6人乗りの捕鯨ボート何艘かが母船から繰り出され、何本もの銚を打ち込んで捕る方法だから、どれほどの期間航海に出ていたかは想像に難くない。通常一旦港を出た捕鯨船は、フィルブリック (Nathaniel Philbrick, 1956-) の *In the Heart of the Sea: The Tragedy of the Whaleship Essex*, 2000 (邦訳『復讐する海—捕鯨船エセックス号の悲劇』集英社) に「ガラパゴス諸島に着くまでの6日間の間に、エセックス号の乗組員は2頭の鯨を仕留めた。それによって鯨油の総計は700バレルになった。満載状態のほぼ半分だ。出航して1年を過ぎたところだった」(p. 71) とあるように、19世紀に入ると船倉が鯨油で満たされない限り帰港しないのが普通であった。

なぜそれほど多くの鯨油が必要であったかと言えば、石油が発見され日常的に利用されるようになるまでは、灯火用の燃料油としてはもちろんのこと、ロウソクの原料、機械用潤滑油、皮革用洗剤、マーガリンの原料などさまざまな用途があったからだ。またヨーロッパへ輸出していたことをクレヴクールが「鯨油がヨーロッパの市場やロウソク製造所へ送られるようになる」(p. 100) と記している。遠洋における捕鯨が盛んになると、如上のように2年も3年も帰港することはないため、鯨油は取るものの腐敗する肉や内臓は全て廃棄していたと考えるのが当然のことだろう。フィルブリックは「鯨の構成要素の一部(頭部、脂肪層、竜涎香など)だけが価値あるものと見なされ、残り一何トンもの肉、骨、内臓—は捨てられた」(p. 65) と記している。鯨は「高収入を生む脂肪の入った自動推進式桶」(“a self-propelled tub of high-income lard” p. 65) と見なされていたのである。

そこに日本とアメリカの鯨に対する考え方に大きな違いが存在した。彼らにとって、鯨は確かに神が造ったものではあるが、「神が彼らに海の生き物を支配することを許したのである」(p. 9)。ナンタケット島の捕鯨船員からクウェイカー教の長老となったペレグ・フォルジャー (Peleg Folger, 1779-1842) は次のような詩を遺している。

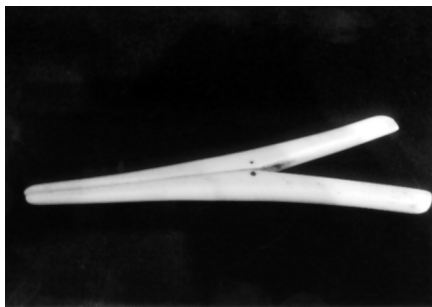
主は鯨という怪物を創造したもうた／それは途方もなく長く／そしてその力は計り知れないほど強い／主は私たちか弱い人間に／(自分と妻と子供を養うために)／この恐ろしい怪物と力の限り闘うように命じられた (Philbrick: 9)

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

ナンタケット島にはクウェイカー教徒以外に長老派やバプテリスト派の人たちもいたが，宗派を問わず誰も彼もが同じ宗教的使命感を抱いていた。彼らにとって鯨は換金できる獲物でしかなかった。従って仔鯨を連れた鯨まで捕鯨の対象にしている。クレヴクールは「多分鯨が仔鯨を連れていて，母鯨が仔鯨の安全のことにすっかり気を取られているのですが，それは願ってもいない状況なのです」(p. 93)と記している。日本人であれば，既に述べたように仔鯨を連れた鯨を捕獲の対象にはしない。仮に誤って対象にしたときには鯨塚を建てて弔う文化を生じさせている。

アメリカの鯨取りは，捕獲すべき鯨が見つかるまでの暇な時間を潰すために金にならない部分を利用することを思いついたのである。しかもそれはマッコウクジラを狙うようになってからのことである。その結果がスクリムショーである。マッコウクジラは他の鯨とは異なって大小の歯を40本ほどそなえている。また下顎の骨がさまざまな日用品を作るのに適していたのだ。ときにはヒゲクジラの鬚でも金にならない部分や屑を利用することはあった。バーンズはその例として，次のように上げている。

鯨取りは仕事がないときにさまざまな『小間物』を彫り出した。パイ生地
にヒダをつける道具ジャギング車，糸巻き機，パラソルの把手，杖，船や
勢子船，鳥かご，箱，バスケット，チェッカー盤，チェスの駒，洗濯挟み，
のし棒，針箱，額，コート掛け，靴の泥落とし，長靴脱ぎ，ドアの把手，
物差し，ナイフ，フォーク，スプーン，玩具，人形の家の家具，ドミノ牌，
ひしゃく，イヤリング，ボタン，カフスボタン，さまざまな鯨の置物，馬
車のムチ，インクスタンド，象嵌文房具箱，何千本もの，多くはハートや
花を丹念にあしらったコルセット用バスケット（張り骨）。(p. 9)



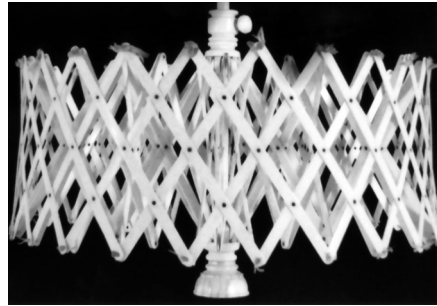
▲ 手袋ストレッチャー（鯨顎骨）



▲ 箱（鯨顎骨レプリカ）



▲ ドアノブ（鯨顎骨）



▲ 糸巻き（鯨顎骨）

ここに紹介されていないスクリムショーの典型的な物は、「はじめに」で触れたマッコウクジラの歯に捕鯨風景や帆船、思いを寄せる女性を線彫りにした置物である。

3. アメリカでマッコウクジラ捕獲とスクリムショーに関わった人々の原型

既に述べたようにアメリカの捕鯨の歴史は17世紀にさかのぼるが、18世紀初頭にはセミクジラよりもマッコウクジラの方が価値あることを知ることになった。それまでは動きが鈍く、死んでも沈まずに浮いている点で都合がよかったため、「捕獲するのに適している鯨」(right whale) と呼んだセミクジラをもっぱら捕獲していたのである。

マッコウクジラの脂肪層からとれる油は燃やすと明るいし、煤もあまり出ず、セミクジラのそれよりも遙かに優れていた。しかもマッコウクジラの頭部には鯨蠟 (spermaceti) と呼ばれる更に優れた油が蓄えられていた。鯨蠟はそのまま掬って樽に詰められる点でも優れていた。その上マッコウクジラの腸内には香水の材料になる竜涎香 (ambergris) が入っていることがあった。ナンタケット島の住民は鯨を捕獲すること以外に生活手段がなかったため、マッコウクジラを追うことになった。1760年にはナンタケット島周辺の鯨は取り尽くされ、遠洋捕鯨へと向かった。それまでの捕鯨航海は長くても9ヶ月ほどだったのが2年以上にのびることになった。

何十人もの男が90トンから200トンあまりの船に2年以上も平穩に生活するとは、どのような人たちだったのだろうか。

18世紀から捕鯨最盛期の19世紀半ばのアメリカは、「神意に基づく、世界

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

のすべての人々の避難所」(“provincially intended for the general asylum of the world” Crèvecoeur: 66) に既になっていたが，宗教的にまだまだ保守的で，ニューイングランドに定住していた人たちの多くがピューリタンの流れにあるか，長老派教会系にあるか，バプテリスト派が多く，閉鎖的で，絶対平和主義，平等主義を貫くクウェイカー教徒を迫害していた。クウェイカー教徒を家に招き入れただけでも1時間あたり40シリングの罰金を課す(Shapiro: 57)ほど迫害していたが，ナンタケット島のバプテリスト派や長老派の人たちは彼らに対して寛容な立場をとった。本土からおよそ50キロも離れたこの島へ説教師が頻繁に訪れることはなかった。そのためクウェイカー教の牧師の説教にも耳を傾けたのである。

ナンタケット島で既に資産家として名声を博していたピューリタンのナサニエル・スターバック(Nathaniel Starbuck, 1635-1719)の妻メアリー(Mary, 1645-1717)は，1701年，56歳のときにクウェイカー教の説教に感動したあまり，これに改宗している。メアリーはその優れた良識と影響力で「ナンタケット島の偉大なメアリー」(“Great Mary of Nantucket”)とか「ナンタケット島の偉大な女性」(“Great Woman of Nantucket”)と親しまれていたため，近隣の人たちもクウェイカー教へ改宗し，島民の半数がクウェイカー教徒になった(同: 59)。したがってナンタケット島では改宗しないまでも，クウェイカー教徒の生き方がいわば模範的な生き方になっていたのである。

ナンタケット島の西にマーサズヴィニヤード島があるが，そこもまた捕鯨基地で，住民の多くはやはりクウェイカー教徒か長老派の信者であった。クレヴクールはこう記している。ちなみにフレンド派(Society of Friends)とはクウェイカー教の正式名称である。

ここの漁業に従事している大多数の下級乗組員，樽製造人，鍛冶屋，楨皮を詰める人，大工などのようなフレンド派に所属していない職人の多くは長老派の信者で，もとは本土からやって来た人たちです。現在，最大の財産を持っているのはフレンド派の人たちですが，みんな一介の鯨取りでした。つまりどれほど金持ちの息子であっても，自分の父親を金持ちにしてくれたのと同じ勇猛果敢な仕事に年季奉公することが，名誉ある，必要なことと見なされていたのです。彼らは何度も航海に出かけますし，若い頃の航海は間違いなく彼らの身体を鍛え，将来の生計手段についての知識を

与えるのです。(p. 98)

この解説から判断できるのは捕鯨で財を成した多くの人たちが、クウェイカー教徒であったり長老派の信者であったことだ。このことは非常に重要な事実である。

既に引いた『復讐する海—捕鯨船エセックス号の悲劇』は、ナンタケット島の捕鯨船エセックス号が航海中の1820年11月20日にマッコウクジラに襲われて沈没の危険に見舞われ、乗組員が三艘の鯨を仕留めるための小型の舟に分乗して南米大陸の西およそ3,700キロを漂流する過程で何があったかを描き出したものである。エセックス号の一等航海士のチェイス (Owen Chase, 1797-1869) の手記『捕鯨船エセックス号の驚くべき悲惨な難破の物語』(*Narrative of the Most Extraordinary and Distressing Shipwreck of the Whale-Ship Essex*, 1821) と近年発見されたキャビンボーイのニカースン (Thomas Gibson Nickerson, 1805-83) の体験記『エセックス号の難破』(*The Loss of the Ship "Essex"*, 1876) を資料として利用している。

積み込んだ飲み水をはじめ食料が尽きると体力のない者から自然死するのだが、当時の船乗りの間では暗黙の了解のうちに人の姿を取り去って、残った肉で生き延びることがあった。その肉もなくなると、くじ引きで食料になる人を決め、命を奪う係もやはりくじ引きで決めたという。この物語では18歳の若者コフィン (Owen Coffin, 1802-21) が食料になるくじを引いてしまう。叔父で船長だったポラード (George Pollard, Jr., 1791-1870) が代わりになると必死に説得するが、取り決め通りにする、とコフィンは譲らない。またコフィンの命を奪わなければならないくじを引いたラムズデル (Charles Ramsdell, 1803-65) も交替を申し出るが断られ、取り決め通りに事が運んだという。

ここで注目すべきは、この時代の捕鯨の中心をになったクウェイカー教徒が、たとえコフィンのようにまだ10代の若者であっても如何に掟を重んじたかということである。このことについてクレヴクールは「…フレンド派の特性としてよく知られているのは、掟の遵守、時には絶対服従、公正、全ての人に対する善意、…秩序への愛…」(p. 86) と記している。陸地であれば決して許されることがないカニバリズムを行いながらも規律ある人間としての良心を保つところには、クウェイカー教徒としての矜持が見られる。エセックス号の二等航海士ジョイ (Matthew P. Joy, 1793-1820) は同郷の者たちに囲まれて死ぬことを

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

望み，船長が乗るボートに移して欲しいと最後の頼みを口にしたものの，1月10日に彼が見せたのは，クウェイカー教徒特有の義務感と献身の気持ち（“a Friend’s sense of duty and devotion” p. 153）であった。「自分のクルーに対する責任感が，同郷の人たちからの慰めが欲しいという気持ちを上まわったのである」（p. 153）。ジョイは元のボートへ戻され，その日の午後4時に息を引き取ったという。ジョイは1817年に会衆派の女性と結婚したためクウェイカー教からは破門されていたそうだが，クウェイカー教旧家の生まれであったため，破門されたことと生き方とは別のことであった。

こうしたクウェイカー教徒が鯨取りの軸になっていたため，捕鯨船内に不穏な空気が漂うことはなかった。鯨に出遭うことなく何日もの間ただただ広い海原に漂うとき，甲板磨きや帆の手入れ，さまざまな器具の手入れだけで過ごすことはできない。ニューベドフォードの捕鯨船アビゲイル号（Abigail）の船長レイナード（William Reynard, 1808-?）は1836年の航海日誌に「暇人の頭は悪魔の仕事場だ。スクリムショーに勤しんだ」（Stackpole: 7）。「暇人の頭は悪魔の仕事場だ」は，まさしく「小人閑居して不善をなす」にあたるわけだが，クウェイカー教徒にはこうした面が見られることはない。

クレヴクールはナンタケット島に住む人たちについて，「怠惰なのくら者も，放蕩生活者も，怒鳴り散らす狂信者も，不快な煽動者もいません」（p. 104）と記している。クウェイカー教徒は寸暇を惜しんで生産的なことをする傾向がある。このことについて，クレヴクールは次のように記している。

怠惰はナンタケット島で犯しうる最も憎むべき罪です。つまり怠惰な人はすぐに哀れみの対象として指摘されますが，それは怠惰が困窮と飢えのもう一つのことばと考えられているからです。この考え方は十分に理解され，一般に広く行きわたっている先入観になっていますから，文字通りに言えば彼らは決して怠惰ではありません。たとえ彼らが市場に行くとしても，そこは（もし私にこういう表現が許されるなら）町のコーヒー店で，商売の取引をするとか，友だちと雑談するところですから，彼らはいつでも手に杉の木片を持っていて，話の間でもほとんど本能的にそれを使ってなにかしら有用なものに作りかえ，例えば鯨油樽の樽口や止め栓，そのほか役にたつものを作ります。（p. 110）

役に立つものを作るといっても、話をしながら作るとはどのようにしてなのだろうか。ナイフを使うのである。クレヴクールは、彼らがナイフを使うその技術に感嘆したことは既に触れた。彼らがナイフを使うことに慣れているのは、「たとえ将来の希望や運命がなんであろうとも、桶職人の仕事をして育つ」(p. 110) からである。しかも彼らはナイフにかかる金銭には糸目をつけないというのだ。職人氣質旺盛と言えよう。クレヴクールが訪ねた「名士の一人」(“one of the worthiest men on this island” p. 111) などは50丁以上のナイフを持ち、しかも「一丁として同じ形のものはない」(p. 111) という。日本の職人も優れた職人であればあるほど道具を自分で拵えるという。自分の手にしっかり馴染み、使い勝手のよいものを拵えなければ、自分が最も優れていると思えるものは作れないのだ。

メルヴィルは、鯨とりがスクリムショーを作るとき「ジャックナイフだけ」(“with their jack-knives alone” p. 1082) と言っているが、クレヴクールが記したことと重ねると何本もの形の異なったジャックナイフを使い分けていたのだろう。しかも捕鯨船には必ず桶職人が乗ってはいるものの、アフリカ系の鯨とりや職場を求めて捕鯨船で働こうとする人たち以外は、クレヴクールが指摘するように桶職人としての経歴を持つ者が多かった。また桶職人ではないにしても、2年、3年、4年と同じ船で生活しているうちに、見よう見まねでナイフの扱いに上達し、鯨が現れない限りありあまる余暇を鯨の歯、顎の骨、あるいは鬚を加工することに費やしたに違いない。

4. スクリムショーはアメリカ独自の文化か？—「おわりに」に代えて

スクリムショーがなぜアメリカ独自の文化と主張され続けたかと言えば、一つには捕鯨船内という特殊な環境で生み出された物の多様性と数のためということに既に触れた。いま一つは、アメリカの捕鯨基地の一つであったマサチューセッツ州ニューベドフォード生まれの画家で著述家のアシュリー (Clifford Warren Ashley, 1881-1947) が、その著『ニューイングランドの鯨取り』(*The Yankee Whaler*, 1926) の第11章の冒頭で「その鯨取りは幸いにも一つの長持ちする記念品を遺した。先住民のものをのぞいてアメリカ独自のただ一つの民藝を余暇に創り出したのだ」(p.111: 傍点筆者) と述べたことである。この陳

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

述が，その後のスクリムショー研究家に大きな影響を与え，固定化したと言ってもよい。そこには歴史の浅い国の愛国心に燃える国民感情が働いている。アメリカの民藝と言われるものに，アメリカン・パッチワーク・キルト (American Patchwork Quilt) がある。キルトそのものは，古くはイエス・キリストの遺体を包んだ聖骸布 (shroud) や中世の騎士が甲冑の下に着用したもので，2枚の布地の間に綿や羽毛などを挟んで刺し子に縫ったものだ。その技を古布のリサイクルに活かした結果がアメリカン・パッチワーク・キルトと呼ばれ，アメリカ独自の民藝になった。1930年代までに作られたものは美術的価値が与えられ，美術館に収蔵されてもいる。しかもアシュリーがアメリカ独自の民藝と言う以前の1851年，スクリムショーについてメルヴィルがその傑作『モビー・ディック—鯨』でデューラーのエッチングにも似る，と取り上げたこともアメリカ独自の文化に固定化しようとする心情が生まれた一因になっていると考えられる。



図2 マッコウの歯



図3 マッコウの歯



図4 セイウチの牙製カップ



図5 セイウチの牙



図6 セイウチの牙製



図7 マッコウの顎骨製の杖

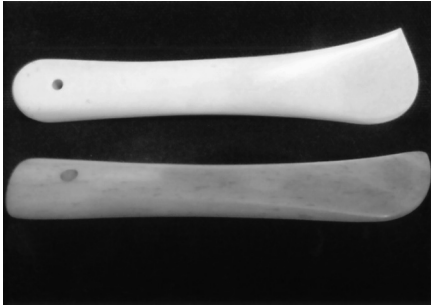


図8 マッコウの顎骨製の和裁ヘラ



図9 マッコウの歯の楊子



図10 鬚製の「はなおさ」

確かに図2, 3に見られるように、その繊細な線によって鯨の歯に浮き彫りにされる絵はまさしくエッチングのごとき素晴らしさがある。これを見て自らの国の文化と言わない者があるだろうか。しかも捕鯨博物館やその他の博物館にいくつも展示されていれば自らの国の文化と思い込むだろう。『スクリムシャンダー』(The Scrimshander, 1978)の著者ギルカーソン(William Gilkerson,

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

1936-) は，その中で，ある捕鯨博物館館長が「アメリカの捕鯨が最も盛んに行われた19世紀の捕鯨船内で作られたものでなければスクリムショーとは言えない」(p. 7) とまで言っていることを紹介している。しかしそれはあまりにも狭隘な考え方で，今では『スクリムショーとスクリムシャンダー—鯨と鯨取り』(*Scrimshaw and Scrimshanders: Whales and Whalers*, 1972) の著者フレイダーマン (E. Norman Flayderman, 1928-2013) の定義に，既に述べた Stuart M. Frank の定義にあるアメリカ以外の国でも作られていたことを加味するとよいだろう。フレイダーマンの定義とは次に引用するものである。

スクリムショーとは，鯨取り，水夫，あるいは海に関わる職業の人が，利用価値があるか，装飾になるものを彫ったり，拵えたりする芸術である。使用する材料は，基本的には鯨から採れるものであるが，その他にさまざまな形態の海洋生物，貝殻，あるいは船が立ち寄る地域で入手できるさまざまな材料や通常船で運ばれたり使われたりする木材や金属などである。できあがった作品は，以下の一つあるいはそれ以上の要素について航海を連想させるものでなければならない。その要素とは拵える人，モチーフ，製作方法，あるいは材料である。(p. 4)

フレイダーマンの定義に木材や金属が含まれているのは，作り出すものにステッキや箱類などがあり，そこに取り付けてあるものが金属であったり，鯨や貝類が象嵌されていたりするからである。

図4は鯨の歯や鬚，あるいは骨から作られたものではない。セイウチの牙から作られたカップである。その表面に彫られている絵はチュクチ族がセイウチ猟をしている風景である。セイウチの牙そのものを使ったものが図5である。長さおよそ70cmの長い牙の両面にチュクチ族のセイウチ猟の風景が彫られている。また，図6は，やはりチュクチ族のもので材料はセイウチの牙である。また，図7のステッキは日本のもので，マッコウクジラの顎骨で作られている。図8はかつて着物を拵えるときに生地にしるしをつけるために用いられたヘラ。図9は楊子で，やはり日本のものである。こうした日本のものは全てが必ずしも捕鯨船の中で作られたものではなく，捕鯨が盛んだった和歌山県太地や宮城県鮎川などの職人の手によるものである。捕鯨基地に間接的に捕鯨にかかわる職人の手でお土産や販売用に作られていたものである。図10は「はなおさ」

と長崎では呼ばれる縁起物で、捕鯨船員が船内で行うことが多い。

『ミスティック港のスクリムショー』(*Scrimshaw at Mystic Seaport*, 1958)の著者スタックポール (Eduard A. Stackpole, 1903-1993) は「スクリムショーのいまだ解かれぬ謎の一つは、その起源だ」(One of the unsolved puzzles of this folk-art is where scrimshaw actually originated. p.4) と述べ、鯨取りが象牙やセイウチの牙に施された彫刻を見てマッコウクジラの歯に応用したと考えてよいのではないかと述べている。そう述べる背景にあるのは、アメリカの鯨取りがフランス北部、ドーヴァー海峡に臨む港町ダンケルクでフランスの象牙職人と接触したり、1787年にはアフリカの東海岸を航行し、1791年には喜望峯廻りで南太平洋に出て行く航海によって象牙細工の知識が鯨取りに入ったのではないかということである (p. 50)。

こうして見てくると、スクリムショーは捕鯨に関わるさまざまな人たちによって作られてきたものであって、必ずしもアメリカ特有の文化と固定することはないだろう。

参考文献一覧

- Ashley, Clifford W. 1926. (renewed in 1966 by Sarah Ashley Delano). *The Yankee Whaler*. New York, New York: Dover Publications, Inc.
- Barnes, Clare, Jr.. 1964. *John F. Kennedy: Scrimshaw Collector*. Boston, Massachusetts: Little, Brown and Company.
- Basseches, Joshua & Frank, Stuart M. 1991. *Edward Burdett, 1805-1833: America's First Master Scrimshaw Artist*. Sharon, Massachusetts: The Kenall Whaling Museum.
- Bullen, Frank T. 1897. *The Cruise of the Cachalot Round the World After Sperm Whales*. Filiquarian Publishing, LLC. / Qontro.
- Crèvecoeur, J. Hector St. John de. 1782. (2013. Edited and with an introduction by Dennis D. Moore.) *Letters from An American Farmer and Other Essays*. Cambridge, Massachusetts, and London, England.
- Davis, William M. 1874. *Nimrod of the Sea, or the American Whaleman*. Franklin Square, New York: Harper & Brothers, Publishers.
- Dolin, Eric Jay. 2007. *Leviathan: The History of Whaling in America*. New York: W.W. Norton & Company.
- Earle, Walter K. 1957. *Scrimshaw: Forl Art of the Whalers*. Cold Spring Harbor, New York: Whaling Museum Society, Inc.
- Floyderman, E. Norman. 1972. *Scrimshaw and Scrimshanders: Whales and Whalemen*. New Milford, Connecticut: N. Floyderman & Co., Inc.
- Frank, Stuart M. 1991. *Dictionary of Scrimshaw Artists*. Mystic, Connecticut: Mystic Seaport

スクリムショー（鯨歯，鯨骨，鯨鬚細工）は果たしてアメリカ独自の文化か？

Museum.

- . 1998. *More Scrimshaw Artists: A Sequel and Supplement to the Dictionary of Scrimshaw Artists*. Mystic, Connecticut: Mystic Seaport Museum.
- . 2012. *Ingenious Contrivances, Curiously Carved: Scrimshaw in the New Bedford Whaling Museum*. Boston: David R. Godine, Publisher in association with the New Bedford Whaling Museum.
- Gilkerson, Wm. 1978. *The Scrimshander: The Nautical Ivory Worker & His Art of Scrimshaw Historical and Contemporary, A New Edition with Many Revisions*. San Francisco: Troubador Press.
- Halat, Eva. 2005. *Contemporary Scrimshaw*. Ludwigshafen, Germany: Verlag Angelika Horing.
- Hellman, Nina and Brouwer, Norman. 1992. *A Mariner's Fancy: The Whaleman's Art of Scrimshaw*. 12 Fulton St New York, NY: South Street Seaport Museum.
- Ketchum, William C. Jr., 1995. *American Folk Art*. New York, New York: Todri.
- Lawrence, Martha. 1993. *Scrimshaw: The Whaler's Legacy*. Atglen, Pennsylvania: Schiffer Publishing Ltd.
- McManus, Michael. 1997. *A Treasury of American Scrimshaw: A Collection of the Useful and Decorative*. New York, New York: Penguin Books USA Inc.
- Malley, Richard C. 1983. *Graven by the Fishermen themselves: Scrimshaw in Mystic Seaport Museum*. Mystic, Connecticut: Mystic Seaport Museum, Inc.
- Martin, Kenneth R. 1991. *Some Very Handsome Work: Scrimshaw at the Cape Cod National Seashore*. Eastham, Massachusetts: Eastern National Park & Monument Association, Inc.
- Melville, Herman. 1851. *Moby-Dick or The Whale in Melville: Redburn, White-Jacket, Moby-Dick*. 1983, New York, New York: Literary Classics of the United States, Inc.
- Mumford, Lewis. 1929. *Herman Melville*. New York, New York: The Literary Guild of America.
- Paszkiwicz, Steve & Schroeder, Roger. 1998. *Scrimshaw: A Complete Illustrated Manual*. East Petersburg, Pennsylvania: Fox Chapel Publishing Co., Inc.
- Philbrick, Nathaniel. 2000. *In the Heart of the Sea: The Tragedy of the Whaleship Essex*. New York: Penguin Putnam Inc.
- Shapiro, Irwin, and editors of American Heritage. 1959 (narrative by Irwin Shapiro in consultation with Eduard A. Stackpole). *The Story of Yankee Whaling*. New York, New York: Golden Press.
- Stackpole, Eduard A. 1958. *Scrimshaw at Mystic Seaport: Featuring Objects from the Kynett, Howland, Townshend and White Collections*. Mystic, Connecticut: The Marine Historical Association, Incorporated.
- Stevens, Jim. 2008. *Scrimshaw Techniques With Gallery of Contemporary Artists*. 4880 Lower Valley Road Arglen, Pennsylvania: Schiffer Publishing Ltd.
- West, Janet and Credland, Arthur G. 1995. *Scrimshaw: The Art of the Whaler*. East Yorkshire, England: Hull City Museum & Art Galleries and the Hutton Press Ltd.
- 大隅清治. 2003. 『クジラと日本人』. 東京：岩波書店
- 川野直樹，河野素子 [美術出版デザインセンター]. 2007. 『ニュージーランド国立博物館 テ・パパ・トンガワレ名品展—マーオリ—楽園の神々』. 東京：東京国立博物館.
- 小島孝夫編. 2009. 『クジラと日本人の物語—沿岸捕鯨再考』. 東京：東京書店株式会社.

社会イノベーション研究

- 小林甚三. 2013. 『小説くじら学校』. 東京：ファーストワン.
- 小松正之. 2003. a. 『クジラその歴史と科学』. 東京：ごま書房.
———. 2005. b 『クジラその歴史と文化』. 東京：ごま書房
- 小松錬平. 1986. 『ギャング鯨サムライ』. 東京：時事通信社.
- 中園成生, 安永 浩. 『鯨取り絵物語』. 福岡市：弦書房.
- 日本とクジラ展実行委員会. 2011. 『福岡市博物館特別企画展 日本とクジラ』. 福岡市博物館.
- フリーマン編著 (高橋順一他訳). 1989. 『くじらの文化人類学—日本の小型沿岸捕鯨』. 東京：海鳴社.
- 前田啓治郎, 寺岡義郎. 1952. 『捕鯨—附録日本の遠洋漁業』. 東京：いさな書房.
- 森田勝昭. 1994. 『鯨と捕鯨の文化史』. 名古屋：名古屋大学出版会.
- 福本和夫. 1960. 『日本捕鯨史話—鯨組マニユファクチュアの史的考察を中心に』. 東京：法政大学出版局.
- 矢代嘉春. 1983. 『日本捕鯨文化史』. 東京. 新人物往来社.
- 四日市市立博物館. 1993. 『開館記念特別展 鯨・勇魚・くじら—クジラをめぐる民俗文化史』. 四日市市立博物館.